

- 発行：ふらっとふらわーず
- 2014春号：第6号
- 連絡先：042-682-2835
- 編集委員：内田信子

ふらっとふらわーず ニュース

- 季節の花：チューリップ
ハナミズキ
- コラム：青いバラ
- 情報：花のイベント

季節の花

★「チューリップ」

ユリ科 チューリップ属



日本の童謡やアンデルセン童話「親指姫」にも登場する春の花壇を代表する花です。品種は早生、中生、晩生、そして原種の4つに大別され、さらに花形と草姿などによって細かく分類されています。チューリップといえば「オランダ」のイメージがありますが、**原産地はトルコ**で、砂漠のような場所に自生し、**トルコ語**では「**ラーレ**（赤い花）」と呼ばれます。トルコにいたオーストリアの大使によって初めてヨーロッパに持ち込まれました。1554年に現在のイスタンブール周辺でチューリップを見かけて、通訳に花の名前を聞いたところ、通訳が花の形のことを聞いているのだと勘違いして「**チューリップ**（ターバンの意）」と答えて以来、その花は「チューリップ」と呼ばれるようになったといわれています。オランダでは気候が栽培に適していたこともあり、一大生産国となり、今では**オランダ国花**になっています。17世紀には、ヨーロッパの上流階級で異常な人気が出て、球根が高値で取り引きされるようになり、巨万の富を得るものもいれば倒産するものも続出しました。この出来事を「**チューリップ狂時代**」といい、世界最初のバブル経済事件だそうです。日本では江戸時代末期に入り、本格的に生産が始まったのは大正8年、新潟県ですが、現在の**生産量1位は富山県**です。オランダ同様、冬の厳しい寒さと雪が球根を一定の状態に保ち、比較的晴天の続く春がチューリップの花をいっせいに開かせる条件に適していました。戦時中は統制の中、畑の隅にこっそり球根を植え、目立たないように蕾のうちに花をつむなどの苦労をしながら、一五〇の品種を守り続けたそうです。このように**世界中で愛され続けられてきた結果、これまでに数えられないほどの品種が誕生し、およそ1000品種**が世界中で育てられています。

◎育て方

栽培環境：日当たりのよい場所で育てます。庭植えの場合は水はけがよいところで連作はできるだけ避けま

水やり：庭植えの場合は雨にまかせ、鉢植えの場合は乾いたときにたっぷりと。次年も咲かせたい時は、花後も続けます。

肥料：用土に緩効性化成肥料を元肥として混ぜ、12月中旬に追肥。お礼肥は新しい球根が腐りやすくなるため施しません。

作業：花がら摘み：花弁が散る少し前に、花首の所で切り取り。球根の保存：翌年も同じ球根を植える場合は、葉が枯れて茎が倒れたら球根を掘り、陰干し乾燥し、吊るし保存します。

◎花言葉

「博愛」「思いやり」「恋の宣言」「花言葉事典より」
（参考：趣味の園芸、ヤサシイエンゲイ、春色チューリップ、財団法人 地域活性化センター）



ユリ味き系



原種系

★「ハナミズキ」

ミズキ科サンシユ属



観賞の対象となっていている花は、本来の花弁ではなく、**総苞片（花のつけ根の葉）**です。そのため観賞期間も長く、秋の紅葉や赤熟した果実なども楽しめます。また自然に樹形が整う木であることから、街路樹や公園木など広く利用されています。和名を「**アメリカヤマボウシ**」と言いますが、「ハナミズキ」の呼び名の方が親しまれています。「ヤマボウシ」の方は古くから日本に分布し、江戸時代には欧米へ渡り観賞樹木として栽培されています。ハナミズキより開花時期が遅く、花先が尖って、葉が出たあとに枝先に開花するので、華やかさは少ないのですが、梅雨時に白い清々しい花を見せてくれます。ヤマボウシの名前の由来はこの**4枚の白い花びらを頭巾をかぶった法師**に見立てて名付けられたそうです。



ヤマボウシ

ハナミズキは1912年、当時の東京市長がアメリカ・ワシントン市の親戚家たちに**サクラの苗木を送った返礼**として、1915年に日本に贈られました。そして2012年、サクラが寄贈されてから**100周年**。米国民から日本国民へ3000本の**ハナミズキが寄贈**されました。3年間で日本各地に植樹される予定です。これから更にハナミズキの名所が増えそうですね。この花の花言葉の1つが「**返礼**」だそうです。

◎花言葉

「私の思いを受けて下さい」「華やかな恋」（花言葉辞典より）
（参考：趣味の園芸、ヤサシイエンゲイ、米国大使館）

コラム

青いバラ 「夢かなう」

「バラ」の花は、紀元前から壁画などに登場するなど、**長い歴史と人気のある植物**です。その中でも**青いバラ**を作り出すのは「**夢**」「**不可能**」とされた時代がありました。

そもそも、花の主な色素の1つ「**アントシアニン**」類は最も重要な花の色素で、オレンジ、赤、紫、青など広い範囲の色を作ります。その中の「**デルフィニジン**」という色素を青い花の多くが持っています。バラ・キク・カーネーションなどでは、この「**デルフィニジン**」という**色素を作る**ことが出来ないのです。

従来の品種改良で作られたバラの中には、青系と総称される品種もありますが、これらにも「**デルフィニジン**」はありません。赤や紅色の花びらに含まれる「**シアニジン**」の量を減らすことで、青く見えるように品種改良されたようです。交配を繰り返してもバラの仲間には青色遺伝子がないため、



サントリアブルーローズ「アプローズ」

青色色素を合成することができず、青いバラを作ることができませんでした。**遺伝子組換え法**を使えば、他の生物の遺伝子を利用して、目的の生物の性質を変えることができることから、このバイオテクノロジーを用いた「**青いバラを作る**」というプロジェクトは、サントリアとオーストラリアのベンチャー企業カルジーンパシフィック社（当時）と共同で、1990年に始まりました。

1991年に**ペチュニア**から青色遺伝子の取得に成功し、1994年にペチュニアの2種の青色遺伝子を入れたバラがやっと開花しました。ところが、遺伝子は確かに入っているものの、色は赤いまま、青色色素は全く検出されませんでした。そこで今度は、いろいろな青い花を咲かせる植物（リンドウ、チョウマメ、トリアなど）から青色遺伝子を取得し、それぞれをバラに導入してみました。しかし、咲いても咲いても「**デルフィニジン**」ができていないという状況が続きました。そんな中、1995年ペチュニアから取り出した遺伝子を、カーネーションに入れ、**青色カーネーション「ムーンダスト」**の作出に成功したのです。

そしてついに1996年、**パンジー**から得た青色遺伝子を導入した赤いバラで青色色素ができ、花の色もはっきりと変化しました。この段階では、まだ青いと呼べるものではありませんでしたが、青色色素が蓄積した場合に青く見える可能性の高い品種を、数百品種の中から選び、並行していろいろな品種に遺伝子を入れることができようになり、組織培養の方法の改良を重ねた結果、**14年の年月を経て**、2004年青いバラの作出を発表し、2009年11月より、「**サントリアブルーローズ**」「**アプローズ**」として販売されています。先日行われたソチ五輪の日本代表選考対象競技会として行われた「**グラソニア**」国際フィギュアスケート競技大会2013で**メダリストブーケ**にも使われています。花言葉は「**夢かなう**」。これからも更に種々の花々で、「夢かなう」青色の花が誕生するようです。



メダリストブーケ



サントリア「ムーンダスト」



青い花から、青色遺伝子を取得

情報 花のイベント

- 国営昭和記念公園・フラワーフェスティバル2014
 - 3月21日（金）～5月25日（日） 国営昭和記念公園
- 第45回文京つつじまつり
 - 4月5日（水）～5月6日（火） 根津神社
- フラワードリーム2014
 - 4月12日（土）～13日（日） 東京ビックサイト
- 第16回記念フラワーフェスティバル由木
 - 4月26日（土）～4月27日（日） 南大沢駅周辺